
今日も少年は墓を掘る

反対ノ反対

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も少年は墓を掘る

【著者名】

ZZマーク

N1820K

【反対ノ反対】

【あらすじ】

舞台は中世末期のヨーロッパ。

町で疫病が蔓延する中、その町に住むとある少年は、墓守の役目を命じられていた。

町が腐敗に満ちていく中、少年は今日も墓穴を掘り続ける。

プロローグ

ザツザツザ。

汚水のようになじり淀んだ空の下、ふと金属が砂利をこするような音が聞こえてくる。

ザツザツザ。

どこからか繰り返しそんな音が聞こえてくる。

ザツザツザ。

見れば、たくさんの墓が立ち並ぶところに少年がいた。

年の頃はおそらく十代の半ば、黒い髪に小柄な体躯、白いシャツは土に塗れてくすんでいる。

少年は一通り掘り終えたのか、手元のスコップを投げ出し、身体を一杯に伸ばした。そこには人独り分は収まるであろう穴が開いている。

少年は、一呼吸置いて、そばに横たわる動かなくなつた人間へと目線を移す。

その肥えた人間の露出した肌には紫色の斑点が浮かんでおり、虚ろな目を向けたまま、口をだらしなく開けて横になつてている。

少年は多めに息を吸つて口を固く閉じ、その横たわる人間の脇に立つたかと思うと、ごろごろとその人間を転がし始めた。

鉛筆のように転がされている人間は、何も考えていないかのように何の反応も見せないまま、ただ泥に塗れていくだけであった。

どさり、と音を立てて、その人間は先ほど少年が掘つた穴の中へと收まり、そこへ少年は容赦なく土をかぶせていく。そのさなか、濁つた眼玉が少年を恨めしく見ているようだったが、少年は黙々と作業に勤しみ、かぶせた土をスコップで叩いては固めていった……。

一仕事終えた少年は、ようやく空を仰ぎ見る。

そこは依然として、光の欠片も差し込まない、暗く淀んだ雲が漂うだけだった。

朝方、少年は寝台から起き上ると、食卓へと向かい、パンと水で朝食を済ましてから家を出る。

その後、少年が家から出でても、優しく笑いかける隣人もいなければ、通行人もそこには見当たらない。寂れた住居の合間合間を風が吹き抜けて行くだけである。

少年は左右を眺めてから、空を見上げ、そしてそれから石畳の道を一步と踏み出していった。

やがて、人影が見えるとこりまでやつてきた少年は、真っ直ぐと見据えていた視線を地面へと落とし始める。

周囲の人影は少年が来ると同時にそそくさと家中へと消えていき、数名の婦女たちが、口汚く少年のことを囁き合っている。

「やあね～」「まだ生きてるの～」「本当に迷惑だわ」

少年はそんな罵詈雑言を氣にもとめず、ただ前を向いて歩いていた。

そんな中、少年の前に三人組みの子供が飛び込んできたので、少年は立ち止まつた。

その子供たちはなぜだか鼻を押さえながら仲間の子供たちに話しかける。

「おいおい、ここなんかくせーぞ」

「ホントだくせー。なんだか腐った臭いがふんふんする」

「なんでこんな臭いが……ん？ あつ、ボルネオだ！」

真ん中にいる子供が力強く、ボルネオと呼ばれる少年に指を指した。

残りの子供たちもわざとらじく、今気づいたように飛び跳ねて、

ボルネオを指差した。

「墓守のボルネオだ！ どうりで腐った臭いがしたわけだ」

そこで子供たちは、ぴょんぴょん跳ねながら口々に言つ。

「やーーい、やーーい、墓場のボルネオ、墓場のボルネオ」

「そこ掘れ、そこ掘れ、墓を掘れ」

「死体は食べるな、泥を食え」

ボルネオはそんな子供たちを無視して、その脇を通り過ぎて行く。すると、子供たちは「きしし」を笑みを浮かべ合いながら、ボルネオの背中を淀んだ眼で見つめていた。

ボルネオが向かっていた先というのは教会だった。

教会は訪れる者すべてに重みを加えるかのように莊厳としており、また、そびえる尖塔が目に付いた。

ボルネオは正面の扉からは入らず、裏口の方へと回つて行った。すると、そこには白地に多少の色合いの施された寛衣を身にまとった、司祭と思しき男がいた。髪が肩にかかるぐらいで、表情はどこか厳めしいところがある。

司祭は、腕を組み、口を尖らせながら言つ。

「今日は、昨日より十人も増えた。いつものようにやつてくれ」

そう言つて司祭は裏口の扉へと姿を消そうとした間際、ボルネオは司祭へ向けて言葉を発した。

「サンスティ司祭、そろそろ墓石が尽きそうですので、証書の方をいただけないでしょうか」

すると、サンスティ司祭は顔をしかめて言つ。

「もうか……。死体を運び終わつたらまた来い。その時に渡してやる」

サンスティ司祭は言つと扉の中へと入つて行つた。

その後、ボルネオは教会の真裏に回り、そこにうず高く積み重なつた死体の山へと視線を注いだ。

死体はどれも紫の斑点が浮かんでおり、ボルネオは「はあ」と小さく溜息を洩らさずにはいられなかつた。

そして、死体を上から順に、そばに置いてある荷車に載せていく、

一杯になると布をかぶせて、荷車を引いて行つた。

ボルネオは死体をすべて運び終えると、サンスティ司祭からの証書を受け取り、今度は石細工の職人のものへと訪れた。

その職人はボルネオを認める、「うつ」と頬の筋肉を引きつけながらもその場からたじろぐことなく胸を張つて構えていた。

「墓守の、なんか用でもあんのか？」

ボルネオはゆっくりと顔を持ちあげ、

「墓石が不足しいるんです。用意してくれませんか？　ここに証書もあります」

ボルネオはそう言つて、懐から証書を取り出し、差し出した。

職人はその証書に軽く目を通し、そしてすぐさま乱雑にポケットの中へと詰め込んだ。

「わかつた。けど、生憎と俺たちはかなり忙しんだ。運ぶとなると明日以降になるがいいか？」

それを聞いたボルネオは慌てた様子で、

「いけません！　それは困ります。埋葬したとして、墓石がないのなら幅取りに支障がでます。万が一、効率の問題で死体の放置時間が延びるのならば、疫病がさらに深刻になってしまいます」

そこで職人は「ちつ」と舌打ちし、軽く溜息を吐いた後に、

「あーだつたら自分で持つていつてくれよ。何度も言うが暇じゃねーんだ。疫病のおかげで人手不足。その原因が誰なのか、おまえが一番よくわかつてると思うがな。まあ奴隸の一人ぐらいなら貸してやるよ。つて言つても一人しか余つてないんだがな」

「それじゃあ頼みます……」

「おう。　おーい、奴隸！　こつちこーい！」

職人が声を上げて呼び立てるど、奥の方からひょっこりと、茶色い髪を棚引かせた黒い瞳の少女が顔を出した。

「はい」

そう返事して近づいてきた少女は凛とした顔立ちで、年の頃はおそらくボルネオとそれほど変わりはないだろう。このぐらいの顔立ちで若い奴隸は、だいたいが上流階級の者がはべらせてしているのだが、しかし全体を見れば、肌は浅黒く、肌荒れが目立ち、少し瘦せていた。

それを見たボルネオは何かの「冗談のでは」とこつた興味深い、訝しだ表情を維持し続けていた。

しかし、職人はボルネオのそんな訴えに気づいている風でもなく、奴隸の少女にボルネオを手伝つように告げてから、「じゃあな」と一言残して、奥の間へと姿を消していった。

一人きりになり、ボルネオが先ほどからの疑問を口にした。

「えつと……君はちゃんと手伝えるのかい？」

「うん」

「……そつか。じゃあ墓石の置いてある所へ案内してもうむつか」

そう言つと、少女は素つ気なく、

「あつち」

と指差し、そちらに向かつて歩き出しだ。

ボルネオが少女の跡を追つていると、採石場が見えてきた。

採石場は高く厳然とした岩壁がそびえ、そこにいる人々の前に立ちはだかっているようだが、実際のところは職人たちの手によって削られ続けた姿である。

そこには数多くの職人たちがあくせくと岩壁を杭で打ち付けたり、取り出した石材を運び出したりと汗をたらしていた。

また、墓石の材料と思われる細長い石材がピラミッド状に積まれているのも目についた。

ボルネオはあらゆる石材で雑多とする中、一番慣れ親しんだであろう墓石がすぐ目についたようで、ずっとそのピラミッド状に積まれた石材の群れを眺めている。

少女は少女でその方へと歩いていくと、職人たちは少女に気づき、訝しんだ表情をとる。けれど、それも一瞬のことで、少女の後ろを歩く人物を見るなり、顔を曇らす者から、眉を上げる者、顔を歪ませる者と様々であったが、どれも不快の表情には変わりなかつた。少女はそれに気付いたのか、後ろを振り返ると、そこには周囲の視線を締め出すように下を向きながら歩くボルネオの姿があつた。

「ふう」

少女は微かな溜息を漏らし、石材の置かれている場所まで足を運ぶとそこで立ち止まる。

「これ」

少女の指の先にあるのは、やはりピラミッド状に積まれた墓石の山だつた。

少年は、下から上へと墓石の山を見上げては、また下から上へと見上げることを繰り返した。

「これをどうやって運ぶんだい？」

ボルネオの問いかけに対し、少女はいたつて簡素に、

「 その荷車 」

そして、ボルネオは、朝方の死体の積み下ろしが墓石に変わり、いくらか救われたように、表情に微かながら、緩んだようにも見えた。

少女は見た目に似合わず力があるので、荷車に墓石を載せるのはボルネオよりも手際がよかつた。

途中途中、ボルネオが少女に、

「 重くないのかい？ 両脇に抱え込んで大丈夫なのかい？ 」

と言葉をかけたが、少女は無表情のまま、

「 へいき 」

とそれだけ答える。

墓石を荷車で墓地へと運ぶ時なんかも、少女が荷車を引いていき、ボルネオが後ろから後押ししていた。

その最中でもボルネオは少女に言葉をかけたが、やはり同じ返事しか返つてこなかつた。

しかし、荷車で墓地と採石場を行き来する中で、少女は一言、

「 あなたがボルネオ…… 」

と小さく呟いたが、これにボルネオは気付いたのか気付かなかつたのか、わずかに顔を上げるだけだつた。

夕日が辺りを赤く染め上げる頃には、ボルネオと少女は、墓地に足りなくなつた分の墓石をすべて運び終えていた。

墓地は相変わらず薄気味悪く、墓標が延々と一帯を覆い尽くし、まるで土は、墓に埋まつた死人から養分を摑つてゐるのか、やけに黒々としており、木々はどれも歪な形で葉の一枚も生えてはいなかつた。

そんなところで、ボルネオと少女は背を一杯に伸ばし、一人、積

み上げた墓石の上へと腰をかける。

二人はただぼーっと正面に並ぶ墓の群れを眺めていた。

が、それもつかの間の休息で、ボルネオはすぐさま仕事に移りかかるうと、その場から立ち上がる。

そんなボルネオに少女が目を細めながら、

「まだやるの？」

墓を見据えていたボルネオは少女へと目線を移し、口を開く。

「そうだね。これからが本番だからね」

そう短く言うと、ボルネオはまた墓の方へと目線を戻し、歩き始める。

それを少女はただただぼーっと眺めていた。

もう辺りが暗闇に包まれた頃、それでもボルネオは仕事を続けていた。少女もなぜだか、まだそこにいる。

「まだ帰らないのかい？」

ボルネオが不審がつて尋ねると、少女は荷車の上で足をばたつかせながら、

「あなたのせい」

と、ボルネオに突き刺すような一言を浴びせた。

それを聞いたボルネオは肩を小さくびくつかせて、伺うように再び尋ねた。

「何が？」

少女は虚ろな表情で空を見上げながら、

「主が言つてた。あなたと墓地へ行くなら家には戻つてくんない。なんでも病原菌がうつるから。だから、もうあたしは捨てられた」かと言つて、少女の顔には悲しみも怒りも表れてはいなかつた。ただ、どうでもいいとばかりに気だるそうな顔を作つてはいるだけだ。それを聞いたボルネオは、やや視線を下げて、

「ああ、そういうことか。それは悪いことをしたね。ごめん」

そんなボルネオの言動に少女は目を見開いてボルネオの方を凝視した。

「謝ったの？」

ボルネオは軽く頷く。

「私奴隸よ。あなたに対して敬語を使ってないし、嫌味だつて言ったのに……」

「奴隸？ どうだつていいよ、そんなこと」

ボルネオはひどく投げやりな調子で、そう答えた。

「変わつてる」

少女がそう言つと、またスコップが土を掘り起し、じゅりじゅりとした音が響き始めた。少女がそのまま口を開くことで、妨げられる。

「なんでこんな仕事をやつているの？」

ボルネオはスコップを動かしながら、

「生きるため」

と短く答える。

「生きるのにしては危険すぎるよ？」

「まあ確かに、僕がいつ、この死体の群れから疫病をもらつともわからない……だけど、僕にはこれしかない。そう言つ君は、なんでここにいるの？ 居場所がなくなつたことは聞いたけど、なにも、こんな危険なところにいなくても良いんじゃないのかい？」

少女は依然として、荷車の上で足をばたつかせて言つた。

「私は、どうだつていいの」

「そうか」

ボルネオは首を傾げながらもさう答えた。

それから一通り作業を終えた少年がスコップを地面に突き刺し、溜息を一つ漏らすと、ふいに尋ねた。

「名前、教えてくれないか？」

少女はどうしたわけかいつたん俯き、じゅらく考えるよつとして、

答えた。

「プロンテ」

ボルネオはわずかに口元を緩ませて、
「プロンテ、家を追い出されたのなら、僕の家に来てくれよ
告げられたプロンテは、目を一瞬大きく見開いたが、途端に難し
い顔を作つておもむろに答えた。
「しかたない」

ボルネオの朝はいつもと違った。

ボルネオ以外に誰もいなかつたはずの家には少女が一人おり、その少女はボルネオとは別の部屋で小さな寝息を立てていた。やがて日は昇り、空はまだ白々としているが、窓から微かな光が差し込んでくる。

少女はその光に目を歪めながら、ゆっくりと身体を起こす。

その土色に染まつた髪の少女、ブロンテは、かけ布団から這い出て、途端に慌てた足取りで部屋を出て行った。

ブロンテが向かつた先は台所だった。

彼女はそのまま朝食のしたくをしようと、食料の入つた櫃に手を伸ばす。が、その途中で彼女の手は止まり、ピクリとも動かない。

「あ、そうか。ここは彼の家」

そう呟くと、ブロンテは先ほどまで寝床についていた部屋へと引き返して行った。

「おーい、ブロンテ？」

ボルネオの呼びかける声に、再び目を覚ましたブロンテは台所の方へとやってきた。

「おーいブロンテ。朝食の支度はしてないの？」

ブロンテは瞼を半ば開けながら、あぐいを一つして、氣だるそうに答えた。

「してない」

さも当然のようなブロンテの態度に、ボルネオはやや困惑氣味に半ば眠気の漂う瞼をしばたかせる。

「そうか、朝食のことを忘れてたんだね」

ボルネオは一人得心がいったとばかりのことを言ったが、実際の

ところ彼女の返答は、

「忘れてた？ 私がなんで朝食の支度のことなんかを考えなきゃいけないの？」

「なんでって、君は仕事をするのが当然だろ？」

そこでプロンテは一つ小さな溜息を漏らりし、真つ直ぐな瞳で一つ答える。

「あなたは私の主じやないわ」

これを聞いたボルネオは面食らつたとばかりに口と皿を開け、数秒と固まっていた。

「あなたは言った。僕の家に来てくれよ、と。だから私はもう奴隸じゃないの」

この少女の言動は奴隸としてはあるまじきもので、まして奴隸が平民の振舞いをするのはもつてのほかであった。

しかし、ボルネオは、言葉に詰まつてなかなか反論できない様子である。

「だ、だけど、君は僕の家に泊つてているんだよ？ 家事ぐらいはやつてほしい」

ボルネオが彼女から田線を逸らし、ぼやくよつと言つて、彼女もボルネオから目を逸らして言つた。

「そう、あなたも私を捨てるの。生きるなと言つたのね。わかつた」

ボルネオは手前で大きく手を振り、大層慌てた様子で、

「違う違う。そこまでは言つてないよ」

「そうなの？ ジヤあここにいることにする」

ボルネオは慌ただしくなつた心臓を沈めるよつて、ゆくゆくと息を吐いた。

「あ、でも」

そこでプロンテは付け足すよつて言つた。

「 墓掘りぐらいは手伝う」

それを聞いたボルネオは何とも言えない複雑な顔をした。

今日はやはり、プロンテがいることも含めて、ボルネオとしては違った日であった。

というのも、ボルネオがいつものように教会へと赴き、そこで死体を預かり、墓場まで運んでいくと、その寂れた墓地には人影があったからだ。

ボルネオたちが近づくにつれ、その人影の像がはっきりと墓地の中から浮き出ていくの、ボルネオは驚きと怪しみを交えた表情で伺っていた。

その人影の正体は老人であり、片手に杖を携えながら、そこいら中に広がる墓の群れを眺めている。

ボルネオはその老人に特に声をかけるでもなく、ちらりと見た後には、自分の作業へととりかかろうとしていた。

しかし、老人は少年の姿を目に捉えるなり、訊かずにはおられなかつたようで、少年をじつと見つめた後に口を開いた。

「なあ、そこの少年。ちと、訊きたいことがある」

そのしわがれた声は、墓場の空氣と同調するように、少年の耳下へとゆづくりと流れてきた。

「なんですか？」

ボルネオは存外冷たそうに、老人に対し背を向けたまま答えた。

「わしの妻の墓はどれかの？」

そこでボルネオが振り向いた時に目にした老人の顔は皺だらけで、もう少しで眠りにつきそうなぐらいに目が細かつた。

「残念ながら、それはわかりません」

ボルネオは突き放すようにそう告げて、再び作業へと取り組もうとする。

「本当に覚えてないのか？ 昨日あたりだと思うんじゃが、何せ死んだのは一昨日だから。その間にわしと同じぐらいに年をとった女性を埋めた覚えは本当にはないのか？ よーく思い出してくれ」懇願するように老人の姿に、ボルネオはただ首を横に振るだけで

あつた。

「残念ながら思い出すことができません。僕は毎日、何十人という死体を土に埋めていますから」

「そうか」

と、老人は力なく答えた。

「……でも、あなたはここに来るということは、その人をとても大切になさっていたんですね」

「当たり前じゃ、わしらはいつも互いに支え合つてきた。疫病なんて関係ない！ わしは何としても墓標に妻の名を刻みたいのじゃ」老人は掠れがすれ力の入った声と共に、杖を握る手にも力を込めた。

「なあ少年。思い出せないのなら墓を掘り返すということはできんかの？」

この質問にボルネオは、目をきつと見据え、口元を固くして言った。「なりません！ 墓を掘り起こすということは死者に対する冒瀆ですか？」

それを聞いた老人は、途端に溜息を吐き、諦めきれずといった面持ちでその場に立ちつくしていた。

そして、ボルネオとブロンテは墓掘りに勤しみ、死体をどんどん埋めていった。

ボルネオたちが再び顔を上げる頃には、もう辺りは夕焼けが支配し、一人の疫病に侵された老人が、黒々とした土の上に横たわっていた。

「やはりか……」

少年が一人呟くと、隣にいた少女がそれを尋ねた。

「妻がここに埋められたのは、疫病だったからだろう。僕はここ最近じや疫病に感染した死体しか埋めていない。妻が疫病に感染したのなら、その夫も感染してゐる可能性が大きいということさ。それに、ここは空気が悪いしね。何よりここに人が来ることは珍しい」

少年と少女は、その新たに加わった死体を埋めるため、再び墓穴を掘り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820k/>

今日も少年は墓を掘る

2010年10月9日20時47分発行